

発達障害のある子のこころ

講師：大阪医科大学付属病院 小児科
金 泰子

はじめにちょっと自己紹介：

皆さんこんにちは、私は大阪医科大学小児科のキムと申します。小児の心身症と発達障害を専門領域とする小児科医です。大学病院やその他の病院に勤務しながら、重度心身障害者（成人）の通所施設や障害児の療育施設、教育機関でも働いています。

大学病院では発達障害、心身症や不登校、難病に悩む子どもと話すことが多く、時にはターミナル期の子どもの看取りに寄り添うこともあります。また重い障害がある人々が通う施設では、胃に開けた穴にチューブを入れて栄養を摂っている（経管栄養）人や、首に開けた穴（気管切開孔）を通して呼吸している人、人工呼吸器をつけている人など、濃厚な医療的処置を必要とする人々に関わっています。そのため私が行う診療の内容は勤務先によって大きな違いがあり、さまざまな年齢の心や身体に悩みや障害をもつ人々や、その親と出会うこととなります。

子どもの治療の際には、親の不安を取り除かないと状態が改善しないことが多いため、親も第二の当事者と考えて接しています。子どもの障害や病気の有無に関わらず子育てには悩みがつきものです。子どもは親とは別の人格を持ち、常に成長し変化しているからです。ところが障害や病気があると、そのせいで他の子どもには起こらない問題ばかり起こっているように思われがちです。子どもの成長を長い目で見守り楽しむことができるよ

う、子育てに悩まれる一時期、親に伴走することも私の仕事かと思っています。

本日は＜発達障害のある子のこころ＞について、私が出会った人々とのエピソードを交えてお話しさせていただきます。

キムの仕事に影響を与えた人たち：

私がなぜ医者になったのかを考えるとときに思い起こされる小学校時代の同級生が二人います。＜よしのぶくん＞は言葉が無く、いつもユラユラと歩いている脳性麻痺がある子どもでした。私は校舎の端にある養護学級によく遊びに行き、彼と仲良くしていたので、行事毎のツーショット写真が今も残っています。少し遠い彼の家遊びに行くこともありましたが、養護学校中等部に進学されてから会う機会がなくなりました。

＜ちえちゃん＞は重い先天性の心臓病のためにチアノーゼがひどく、小学5年からは在宅で過ごさざるを得なくなりました。彼女との交流は25歳で彼女が亡くなるまで続き、還暦を前にした今も時々＜ちえちゃんち＞に遊びに行くことがあります。

私が医者になり小児科を選んだこと、障害や難病がある人に心惹かれることには、二人との素敵な出会いが影響しています。二人と出会ったことが、私の今につながっているのです。だから、人が何を成したかということだけでなく、その人がいること、その人と時間を共にすることには、他の人の生き方を左

右するような意味や力があることを信じて疑いません。

また障害について深く考えるきっかけをくれた人も二人います。〈みわさん〉とは阪神淡路大震災直後、兵庫県内の施設の嘱託医になってすぐの頃に出会いました。重い運動麻痺がある彼女は、話したくても口がこわばり「ウーッ」「アーッ」という声しか出せません。初めて彼女の診察をすることになった時、スタッフから、彼女が平易な言葉は理解出来ること、問いかけに対して右足を挙げて『はい』、左足を挙げて『いいえ』と返事が出来ることを聞いた私は、戸惑いながら声をかけました。「みわさん、具合が悪いのですか?」、『はい』の右足が高く上がりました。ところが「頭が痛いのですか?」「体が痛い?」「お腹?」どこを聞いても『いいえ』の左足が挙がります。困り果てた私がハッと気がついて「ひょっとして心が痛いのですか?」と聞くと、彼女の右足が高く上がりました。「心が痛いのは、何か悩みがあるからですか?」『はい』「それは自分のこと?家族のこと?暮らしのこと?」。時間をかけてたどると、こんなことがわかりました。『父が亡くなり、今は母と二人暮らし。震災後、母がパートに出たあと一人ぼっちで過ごす時間に地震がまた起こるのではないかと不安でたまらない。だから帰って来た母が疲れているのに、私は怒って反発してしまう。母無しでは生きて行けない私なのに、母がいなくなったら、どうやって生きて行けばいいのかわからなくて不安になる……』話をまとめ「そんなことを考えて、悩んで、心が痛かったのですか?」と返すと、彼女は右足を高く挙げたまま声を上げて泣かれました。

私は彼女のように重い障害を持つ人が、そんなことを考えていることに思い至りませんでした。言葉が話せない状況にある人と、時間をかけてそのようなやりとりをしたことがなかったからです。彼女の心の内を知ること

が出来たことに私は浮かれ、そしてすぐに気がつきました。彼女は私が問いかけたことに対してはイエス・ノーで答えられても、私が問えなかった思いは伝えられないということです。この出来事以降、縁あって出会った人の思いを聞きとり、受け止められる、心の耳を持ちたいと思うようになりました。

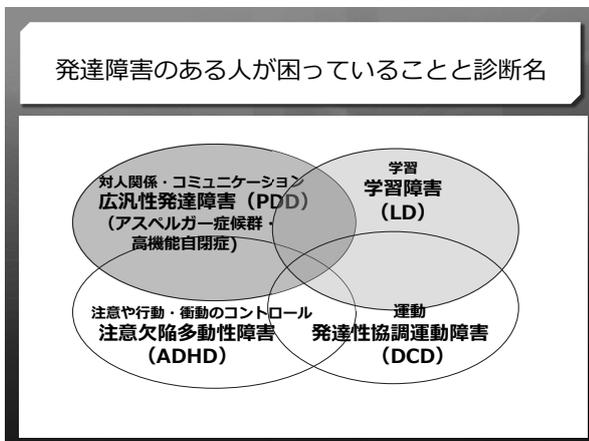
施設に勤めて数年後、運動麻痺のため明瞭な発声が難しいものの、時間をかけて会話が出来る〈ただしさん〉が振り絞るような声で私を呼び止めました。『キム先生、このごろ何でそんなに姿が見えへんの?』いつもなら診察が一段落すると、施設のあちこちの部屋を覗き、皆さんとおしゃべりする私が、職員室から出て行かなくなったことが気になったようです。「大好きなお父さんが死んでね。とっても悲しくて、だれと話しても涙が出てしまうから、今は人に会いたくないの」と正直に答えると、彼は一生懸命、時間をかけて、こう言ってくれたのです。『キム先生、ぼくは何もしてやられへんけど、つらいときは話ぐらい聞いてやる。話したくなったら僕を呼んで』。私の目からは涙がポロポロ。何か助けになることがあればという思いで障害者施設の仕事を引き受けたのですが、動けない人々だからこそ定点から私を見つめ、変化に気づき、思いやってくれていることがわかったからです。そして、いつも教えられ、助けられ、救われているのは私の方だということにも気づかされました。

障害にまつわる不思議：

〔障害〕というのは不思議です。障害が目に見えやすくはっきりしている場合や、その程度が重度である場合、障害により出来ないことがあっても人々は理解します。見えない人に目で見えることを、動けない人に動くことを求めません。ところが障害により出来ないことがあると、それ以外の事もできない、わ

法の施行前の平成14年、教員が調査票に回答する形で全国調査が行われ、公立の小・中学校の通常学級において、学習面あるいは行動面で著しい困難がある生徒は6.3%という結果が出ました。平成24年の再調査では震災後の東北3県は除かれていますが、6.5%でした。けれども巡回相談などで学校を訪れるとく気になる子ども>の数は、もっと多いと感じます。

発達障害のある人が困っていることと診断名：



発達障害のある人が困っていることを、定義に基づいて4つにわけて考えてみましょう。

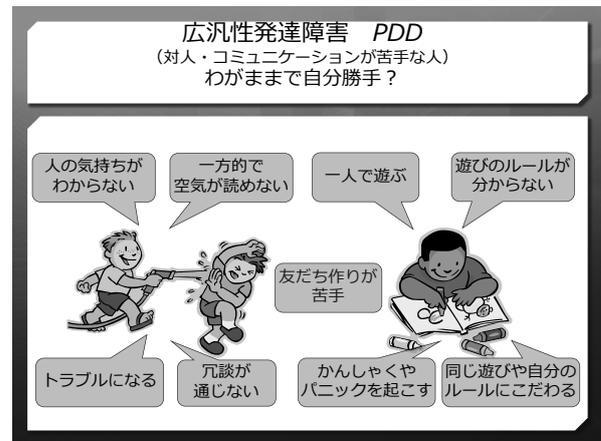
- (1)対人関係やコミュニケーションの問題がある人→広汎性発達障害 (PDD)
- (2)読み・書き・計算・文章の理解など、学習上の問題を持つ人→学習障害 (LD)
- (3)注意や行動・衝動のコントロールに問題がある人→注意欠陥多動性障害 (ADHD)
- (4)運動が極端に苦手な人→発達性協調運動障害 (DCD)

大事なのは、図の中でそれぞれが重なっている部分です。発達障害では困っていることが一つだけの人より複数の重なりを持つ人が多く、重なり具合で様子が異なって見えます。例えば自閉の特徴がありながら、多動のある人と無い人では、本人だけでなく、関わる人の悩みや大変さも変わります。

次にそれぞれの障害について簡単に説明し

ましょう。

(1) 広汎性発達障害 PDD；



広汎性発達障害は、対人関係やコミュニケーションの障害、こだわりといった自閉症の特徴のある人の総称です。このなかに、サブカテゴリーと言いますが、アスペルガー症候群・高機能自閉症などが含まれます。

- *アスペルガー症候群は自閉症の特徴を持ち、言葉の発達の遅れがなく、知的発達の遅れを伴わないタイプの人をさします。
- *高機能自閉症は、自閉症の特徴を持ち、3歳までの言葉の発達に遅れがあるものの、知的発達の遅れを伴わないタイプの人です。ここで高機能というのは、能力が高いということではなく知能の明らかな遅れが無いことを意味します。

自閉症の特徴を持つ人は人の気持ちがわからない、一方的で空気が読めないと言われます。たとえば図の子どもたち。ボクは「水が冷たくて気持ちいい。キラキラはじけておもしろい。たっちゃんも楽しいよね！」と思っているけれど、たっちゃんは「いやーっ、冷たいからやめてー！」と困っている様子。自分が楽しいから相手も楽しいと思っているのに、先生が「嫌がらせをしちゃダメ！」と誤解して制止すると、怒られる理由が理解できずに混乱します。捉え方が違うのです。

自閉症の特徴をもつ人は冗談が通じないとも言われます。言葉を言葉どおりにとり、そ

の場の状況や相手との関係性、相手の表情や声のトーンから真意をとらえることが苦手です。「アホ」「バカ」という言葉も「何言うてんのん、アホやなあ」と親しい人に言われる愛情ある「アホ」と、「何言ってるんだ！お前はアホかッ！」と語気鋭く向けられる「アホ」には違いがあることが理解できず、愛情ある「アホやなあ」にも傷つきます。ですから私が冗談をいう時は「今のは冗談やで～」 「ラブの入ったアホもあるねんで～」と付け足します。

自閉症の特徴を持つ人はこだわりが強いと言われます。＜同じであること＞にこだわるのは、変化に弱く想定外の出来事に不安を感じるということでもあります。急な予定変更混乱し、いつもと違う道を通ると怒り出す。物の並び順にこだわり、同じ服や靴ばかり身につけるといった相談は稀ではありません。でも悪いことばかりではありません。時間や手順にこだわる人はルーチンワークに強く、就労後には時間厳守し、作業をキチンとこなす几帳面な人ととらえられることも多いのです。

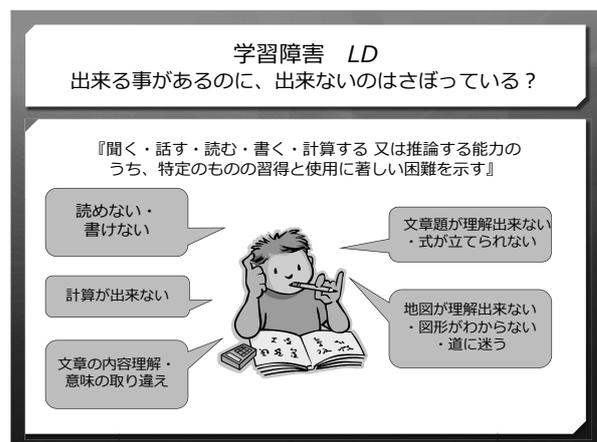
こだわりはルールの変更が苦手ということにもつながります。たとえば鬼ごっこで鬼にタッチされたら鬼になる、というのはとてもシンプルなルールです。けれどもタカオニでは、鬼より高い場所にいる時はタッチされても鬼にならない、ケイドロでは鬼に捕まっている人が捕まっていない人にタッチされたら解放される、というふうにルールがどんどん変更されると混乱し、「ずるい！」と感じて同じ遊び方にこだわります。ルールがわからなくなって遊びの輪から外れても、友達と遊びたい子、見る・観察することが得意な子は、離れた場所からジッと見ていて、要領がわかってから遊びの輪に戻ることがあります。遊びの輪に入れず一人遊びを始める子には、ルールを説明し一緒に動いてくれる支援者がいれば、出来る・わかる・楽しめることもあ

るのに、と残念に思います。

ところで、小学校も高学年になると、同級生の中に、わざとルールを複雑にして特定の子を仲間外れにし、その子ばかりが鬼になるように工作する子どもが出てきます。お母さんから見るとイジメなのに、空気が読めない我が子が楽しそうに鬼をしていると、親の方が腹立たしくイライラします。そんな時、親には「あの子は仲良く遊んでいるようなふりしてるけど、意地悪してる腹黒い子やで～って、教えますか？」と問いかけます。人の言動の裏が読みにくい我が子に、人を疑えと不信感を持つような説明をしますか？ということです。

子どもには遊びや仲間が必要です。子ども自身が意地悪されていることに気づくまで、周りの子どもに「おばちゃんは、あなたのしていることを見ているよ～。意地悪したらゆるさへんで～」と笑顔で無言のサインを送り、親の存在を知らしめながら見守って、と助言します。意地悪されていることに気づいた時の我が子への対応はと聞かれたら、「もちろん、その時は子供と一緒に怒って下さい！」

(2) 学習障害 LD；

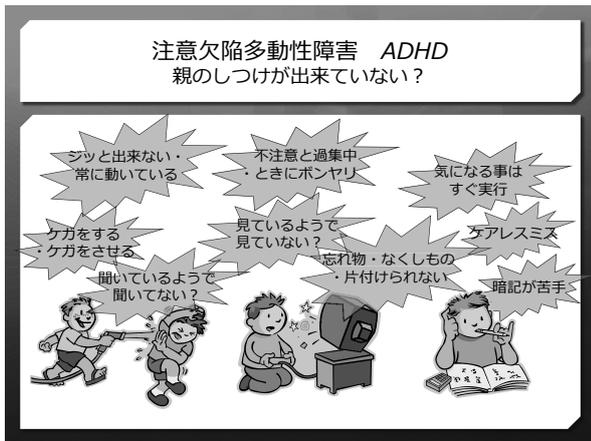


学習障害は『聞く、話す、読む、書く、計算する、または推論する能力のうち、特定のものの習得と使用に著しい困難を示す』と定義されています。出来ることあるのに出来ないのは、好きなことばかりして嫌いなこと

をサボっていると言われがちです。読めない・書けない、あるいは読み書きに時間がかかる、読めるのに書けない場合もあります。計算ができない、あるいは計算は得意でも文章が理解できず文章題で式が立てられない子や、図形や地図を読むことが苦手な子もいます。

文字を読み飛ばす子は行を指でなぞりながら読み、読むことが苦手な子は教科書を丸覚え、と自分なりに工夫していることもあります。それを「ちゃんとしなさい!」と叱らず、できないことの原因を考え、特性を見極めたうえで指導法を工夫し、必要な時にはワープロや計算機、タブレットなどの電子機器を使うなど、学ぶことを諦めないための配慮や工夫・支援が必要です。

(3) 注意欠陥多動性障害 ADHD ;



多動・不注意・衝動性を特徴とするADHDの子どもは先生の悩みの種、親のしつけが出来ていない乱暴な子と思われがちです。多動・不注意・衝動性が全てある場合と、不注意、あるいは多動性・衝動性のみが目立つ場合があります。

多動性のある子は小さい頃にはウロウロと動き回りますが、成長とともにそれは減ります。でも、座っていてもゴソゴソ・ガタガタと絶えず体のどこかを動かして、やはりじっとしていることが苦手です。

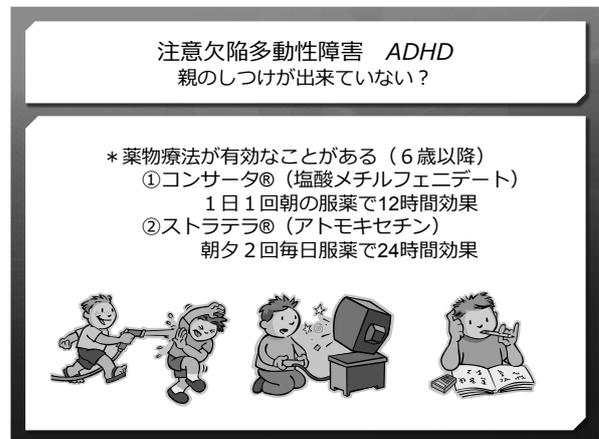
不注意のある子は何事にも注意集中が難し

く気が散りやすいと思われませんが、好きなこと・得意なことには過集中します。その結果まわりのことが見え聞こえなくなるので、やはり不注意だと言えます。またぼんやりした状態になり集中できないタイプの不注意もあります。

関心があることは遠くにいてウロウロしていてもよく聞き、よく見えています。一方で関心のないことはすぐそばにいても聞こえず、見えないことがあります。次々に関心が移るので、忘れものや失くしものが多く、片付けられない。テストでは問題を最後まで読まずに答え、ケアレスミスを連発します。覚えたことをすぐに忘れてしまう、と本人から相談されることもあります。

同じ子どもでも、苦手なことを刺激が多い場所でして集中できないときには酷評され、好きなことに過集中している場面を見た人からは素晴らしく集中力のある子だと絶賛されます。どちらも正しい評価で、子どもが変わったわけではありません。状況が違うのです。

衝動性はカッとなる、暴力的ということではなく、思ったらすぐ行動してしまうということを意味します。状況を考える前に行動するため、失言があり、順番が待てず、不注意も加わって、怪我をしたり、させたりすることがあります。



ADHDには薬物療法が有効なことがあります。子どもの治療薬として日本で認められ

ているのはコンサータとストラテラという薬で、いずれも6歳以降投薬が可能です。けれどもADHDと診断した人すべてに投薬するわけではありません。まずは子どもの特性に合わせた環境調整が大切です。

コンサータには中枢神経刺激作用があり、1日1回朝食後に服用すると、即効性のある薬がカプセルからゆっくり溶け出し、12時間程度効果を発揮します。学校など刺激の多い場所での不注意がある人に使いますが、副作用である食欲不振や吐き気が起こることが少なくないことが悩みの種です。副作用や依存性を心配される方が多いので、休日の休薬をお勧めしています。

ストラテラは中枢神経を直接刺激する薬ではなく副作用も少ないと言われます。学校・家庭で不注意が目立つ場合に使うことが多く、24時間効果を持続させるため、毎日朝晩2回服用していただきます。少しずつ増量し、効果を実感するまでに1ヶ月以上かかることが悩みの種です。薬剤は子どもの状況に合わせて選択し、子どもにも丁寧に説明したうえで飲むかどうかを決めてもらいます。

使って食べることや、ハサミや塗り絵が苦手といった手先の不器用さが目立つ場合と、走る・飛ぶ・自転車に乗ることなど、身体全体をスムーズに動かすことが苦手な場合があります。リコーダーなどの楽器演奏や技術家庭、体育の時間に苦勞します。

上手く出来ないことを繰り返し練習させられますが上達しないため、努力不足と評価され、本人は自信を失い意欲をなくします。不器用は就職においても不利に働くことがあり、対策を考える必要があります。

発達障害のある人がぶつかる課題：

発達障害のある人がぶつかる課題

① 乳幼児期	母子関係、しつけ、言葉でのやりとり、はじめての集団生活
② 小学校	集団行動、学習、交友関係の深まり、社会的ルールの理解
③ 中学校	部活、教科担任、定期考査、進路選択、思春期の嵐★
④ 高校	受験、進級（留年・退学）、部活、校則（停学・退学など）
⑤ 大学	自主性が必要とされる課題、長時間の講義、レポートや論文作成、複雑な人間関係、親を離れての生活、就職活動
⑥ 成人期	<ul style="list-style-type: none"> * 就職活動—やりたい事も自信もない、決められない、面接で失敗 * 就労後 —人間関係での種々のトラブル、約束や期日が守れない、要領が悪い、指示が通らない、指示した事しがない、集中のムラやケアレスミスがある

(4) 発達性協調運動障害 DCD；

発達性協調運動障害 DCD

不器用・運動音痴は努力不足・親のせい？

不器用は脳機能の一つである「協調」の発達障害
協調＝運動や手先の器用さにつながる脳機能



聞きなれない診断名かもしれませんが、本当の意味での不器用や運動音痴は脳の機能障害と関係しているといわれ、発達障害のある人全般に見られます。運動のぎこちなさは幼い頃から気付かれていることも多く、箸を

発達障害のある人は、成長の節目節目に困難にぶつかります。

乳幼児期、自閉の特徴のある子どもは、視線が合わずあやしても笑わず、一人遊びを好むことがあります。言葉の遅れだけでなく、気持ちのやり取りが難しいと感じた親は育てにくさを感じます。多動な子どもは歩き始めると同時に走り出し、飛び出し、どこにでも行ってしまうので親は疲労困憊、しつけがしにくいと感じ、周囲の視線を気にようになります。保育園や幼稚園に入ると、他の子どもの違いが見え、さらに親の不安は高まります。友達と交わらないことが心配、逆にトラブルが多発して責められることもつらいと悩まれます。

昨今は入学前に発達障害の診断をうけ、学

校生活で遅れを取らないようにと、療育や早期教育に多忙な生活を送る親子と出会うことが増えました。けれども学習の習得にのみ全力を注ぎ、生活管理を親に任せきりにして生活力をつけられなかった人が、自立に際して困難にぶつかる様子をたくさん見えています。ですから〈お手伝いの勧め〉と〈自己管理〉すること、〈自己決定・自己責任〉の大切さについて、小さい頃から親子と話し合うようにしています。

小学校に入ると、集団のルールを守り、学習に取り組まなくてはなりません。低学年では注意や行動に加えて学習の問題が、中学年以降は友達との関わり、つまり対人関係やコミュニケーションの問題が相談の中心になります。発達障害のある人では、早期から不登校・引きこもりが起こるため、そうなる前に子どもたちの状況を理解し、支援することが大切です。

中学生になると、子どもの生活は多様になります。クラブ活動は学年ごとの縦割り関係がはっきりしていて分かりやすく、自分の得意な活動を選んだ子どもは其中で活躍する場を得ます。変化が苦手な子どもは教科ごとに先生が変わっていくことに戸惑う時期がありますが、好きな教科や先生を見つけられると学校が楽しくなります。一方で、定期考査のために要領よく勉強し、進路についても考えなくてはならず、不注意や学習面での困難がある人には辛いことが増えます。

この時期に思春期の嵐がやってきます。大人への反抗、自分探し、性の目覚め。仲間との濃厚な付き合いの中で不登校や非行の問題が起こる時期でもあります。思春期の体の変化や性的な関心などは同性の間で情報交換されますが、友達がいないと生の情報が入ってきません。そのため第二次性徴の兆しが見えたころ、特に男子には「今日はキム先生が小児科の先生として大事なお話をします」と居住まいを正し、精通やマスターベーションに

ついて説明する日があります。恥ずかしく嫌らしいことではなく、大人になる準備ができたという、おめでたくて大切なこととして、正しい知識を伝えたいと思っています。

高校生活では、最初に受験という関門をクリアしなくてはなりません。また行動や成績によって学年ごとに進級というステップを越えなくてはなりません。入学後は対人関係や学習上の困難さから学校生活になじめない子、衝動性が強く校則違反を繰り返し、嵩じては非行・犯罪などの理由で停学や退学処分を受ける子も出てきます。

大学生活では自主性が必要とされます。講義の時間は長く、言葉の理解だけでなく思考・表現する力が必要とされるため、コミュニケーションが苦手で集中力の無い人たちにとっての難行苦行が続きます。最近は特別支援の相談窓口を設け、入学前から相談・支援を受けられる大学が少しずつ増えていますので、学校と本人から依頼があれば、診療情報や意見書の提供というかたちで応援しています。

成人期になると自立と就労が課題となります。最近の若者事情と同じかと思いますが、やりたいことが明確にある人が多いとはいえません。失敗が多く自信がない人は、自分に出来る仕事があるのかわからないと言い、過保護・過干渉な環境の中で育った人ほど、自分では決心できずに人任せにします。

就職できたとしても、発達障害のある人の特性に対する理解や支援がない職場では、要領が悪い、気が利かない、ものの言い方を知らないと言われ、時として人間関係のトラブルから仕事を続けることが困難になる人もいます。この時に、自身の特性を職場でカミングアウトして理解を得て働き続ける人、一旦退職し、発達障害に関する医師の診断書に基づいて精神障害者保健福祉手帳を取得し、障害者雇用により特性にあった職場に就職する人、同じく手帳取得後に職業訓練を受け、安定して働けるようになる人もいます。けれど

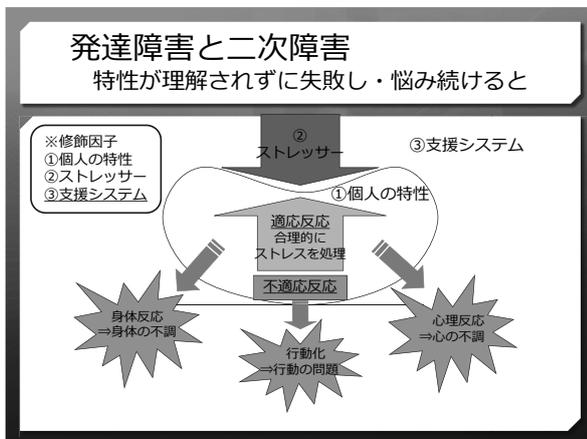
も精神を病んで引きこもる人や、家庭内で暴れる人もいます。

こんな話ばかりしていると、保護者の方は不安になりますね。発達障害のある子は失敗ばかり、お先真っ暗かという決してそうではありません。

定型的ではない発達特性を持っていても理解の良い環境で育った人は、診断を受けなまま適性に合った進路を選び、充実した日常生活を送っています。発達障害は偉人と言われる人の中にも多いと言われていています。一方で、強い特性により不調な時期を経て診断を受け、自他ともに障害特性に対する理解を深め、必要な時に支援を受けながら進学や就職、自立の道を順調に歩んでいる人もいます。けれども、順調だからといって障害が治ったわけではありません。

たとえば自閉の特徴がある人のこだわりは、作業における時間厳守・正確なルーチンワーク・真面目な勤務態度として高く評価されることがありますが、接客を任せられると混乱するでしょう。適性にあった領域では適応できても、そうでない環境に進むと、その特性が短所になってしまう。適材適所が大切です。

発達障害と二次障害：



たとえば、強い特性を持つ個人を丸いボールだと仮定します①。様々なストレスの原因となるものつまりストレス②が加わった

ときにボールは凹み、ストレスが大きすぎるとパチンとはじけてしまいます。ストレスが加わっても、その人の適応性が良く、いろいろな経験をしてストレスに耐える力をたくわえ、自分でできない時には誰かに相談するなどして解決方法を見つけ、ストレスをやり過ごすことが出来るなら、ボールはしなやかにたわんだあとストレスを押し返すでしょう。また、発達障害のある人を支援するシステム③、つまり周囲の人や機関や制度が有効に機能して、はじけそうになった個人をしっかり守ることができれば、ボールはたわみながらもはじけずにストレスを押し返すことができるでしょう。これを適応反応といいます。

ところがストレス②が強すぎる場合や、個人の特性①が理解されない環境の中で、種々の生きにくさを持っている場合、あるいは理解され、支援が受けられる環境③が整っていない場合には、ボールは均衡を保つことができずにはじけてしまう、つまり不適応反応が起こってきます。

不適応反応として種々の問題が起こることが知られています。子どもや発達障害のある人は言葉で表現することがうまくできず、心の不調を体の不調として訴えることがあります。痛い・苦しい・だるい・しんどいといった症状だけではなく、時には歩けない・見えないという問題が起こり病院受診されることがありますが、身体の治療だけをしてもなかなか症状が改善しません。発達や心理面への配慮が必要です。

また行動の問題として、かんしゃくやけんか、不登校やひきこもり、家庭内暴力や破壊行動、自傷や自殺、時には窃盗や暴力行為により警察のお世話になるようなことも起こります。

また心の不調により、感情の起伏が激しくなる、あるいは抑うつ的になる、時には手洗いや確認行動を繰り返すといった強迫症状などのために精神科受診されることもあります。

身体症状や、問題行動、精神症状の背景に、気づかれないままにいた発達障害が存在している可能性があること、学校や家庭ではなく小児科や内科、精神科、警察などが発達障害の気づきの場所になることもあるというわけです。

発達障害のある人を守るために：

発達障害のある人を守るために

- ・相談 保健福祉センター・保健所・家庭児童相談室・子ども家庭センター・発達障害者支援センター・精神保健福祉センター・親の会
- ・診断と治療 医療機関（小児神経科／心療小児科／心身症外来／発達外来／児童青年精神科・・・精神科／心療内科）
- ・療育 医療機関・発達障害者支援センター・子ども療育センターなどの障害児等療育支援事業所

・社会支援制度

医療費：生活保護、自立支援医療（精神通院医療）

手 当：特別児童扶養手当（20歳未満）、障害年金

障害者手帳：療育手帳、精神障害者保健福祉手帳

障害者自立支援法に基づく各種サービス（児童デイ、短期入所等）

子どもの発達が年齢相応ではないと感じる時、ほかの子どもとは違った特性があるのではないかと不安に思う時、子どもに心身の不調や行動の問題がある時、子育てに困難を感じて相談したい時に、最初に病院を思い浮かべる方は少ないかもしれません。

地域には様々な子育て相談機関があり、学齢期の子どもの、特に学習に関する相談であれば学校を含め、教育相談機関があります。

病院では、主として小児科・精神科の専門外来で対応しています。

療育は病院だけでなく、公的機関や教育機関、最近は療育支援事業所が地域にたくさん開設されていますが、内容には格差があるようです。

また、図の枠内に示したように、発達障害のある人を守る種々の社会支援制度があります。いずれも診断を受け、一定の条件を満たせば利用できます。

発達障害のある人は明らかな知的な遅れがない方が多く、児童相談所で知的障害の判定

を受けて交付される療育手帳の対象となりません。しかし発達障害の診断を受けている場合には、医師の診断書に基づいて精神障害者保健福祉手帳を取得できる可能性があり、これがあると成人期の自立・就労支援を含む種々のサービスを受けることが出来る、ということを知っていただきたいと思います。

発達障害に関わる専門医療機関で出来ること：

発達障害に関わる専門医療機関で出来ること
(小児心療外来・小児神経科・小児発達外来など)

- 1) 医学的評価と診断（発達障害および併存障害・二次障害）**
 - ・診察および心理発達評価（生育・発達歴、行動観察、心理発達検査）
 - ・血液・尿、脳波、頭部画像検査（MRI、CT）
 - ・他科での精査（眼科・耳鼻科・歯科口腔外科・整形外科など）
- 2) 医学的対応**
 - ・本人（年齢と状況に合わせて）と 保護者への告知
 - ・薬物療法（多動や不注意・パニック・心身症など）
 - ・療育、SST（ソーシャルスキルトレーニング）、カウンセリング
- 3) 保護者への対応**
 - ・疾病教育、養育指導、カウンセリング、PT(ペアレントトレーニング)
 - ・関係機関（教育・保健福祉・行政など）についての情報提供と助言
- 4) 学校あるいは関係機関への対応、成人期医療への移行（精神科紹介）**
 - ・関係機関への情報提供と指導・助言・診断書・意見書の作成など

病院では診断と治療を行います。発達障害を積極的に治療することはできなくても、不注意や多動、かんしゃくやパニックといったもともと見られる症状や、二次障害を含む心身の不調に対する治療を、投薬を含めて行うことができます。またいろんな療育を受ける道が開けます。

けれども子どもは大人になりますので、一部のケースをのぞいては小児科医が成人期まで長くフォローすることはできません。私自身は高校生ぐらいまでは定期的に見守っていますが、高校を卒業する頃には成人期の相談を受けてくれる先生のところへ変わることになる、と早くから親子に伝えるよう心がけています。

成人期医療への移行は、引き受けてくださる精神科・心療内科の先生の絶対数が多いとは言えず、また専門医療機関の待ち時間が長いこともあり、なかなか順調には進みません。

高校卒業後の子どもたちがずっと通おうと思える先生が見つかるまで、その子にとって良い先生探しをしています。私とは長い付き合いですから、外来を卒業するにあたっては親子の不安が強く、継続受診を希望されることもあります。ケースによっては軸足を成人期医療に移したあと落ち着かれるまでの期間、転院先にお断りした上、年数回お話だけしに来ていただきます。

キム外来へ ようこそ：

キム外来へ ようこそ

◆ 子どもたちとの三つの約束

- ①自分の気持ちを自分の言葉で話す
- ②自分のことは自分で決める
- ③出来ることは自分でする

◆ キムの誓い

- ①診療がく業務・作業にならないよう愛をもって
- ②業務連絡（指示・命令・確認・評価）でない会話
- ③〈好き〉と〈ありがとう〉は惜しみなく

キム外来は一人一時間の子どもの中心の外来です。幼い子ども、障害のある子ども、子どもが「いいよ」と言えば、親と離れて私と二人で話します。ひとつひとつ確認しているわけではありませんが、子どもと話す中で、当たり前になっていく約束が三つあります。

※子どもたちとの三つの約束

- ①ひとつ目は、自分の気持ちを自分の言葉で話すということです。自分のことは自分が一番よくわかっているはずだから、あなたに聞くよ。わからなければ「わからない」と言ってね。忘れた時にはヒントをあげる。答えたくない時には「答えたくない」と言ってもいいよと伝えます。多くの子どもが、わからない・できないということは、恥ずかしい・いけない・格好悪いと思っています。例えば発達検査をするときに、

「わからないときはわからないって言ってください」と伝えても、「わからない」と言えずに黙っている子がいます。「わからない？」と聞けば『うん』と答えるのに、自分からは言えないのです。だからキム外来では『わからない』『できない』『したくない』と答えられたときには「素晴らしい答えです！」と絶賛します。

- ②ふたつ目は、自分のことは自分で決めるということです。お薬を飲むか、次の予約をとるか、先ず子どもに相談します。丁寧な説明をしても「薬はイヤ」な時は、状況にもよりますが時が来るのを待ちます。

子どもが「病院に来たくない」時には「あなたが大好きなのに叱ってばかりしてしまうお母さんの悩み相談のため、お母さんの予約をとってもよいか」確認します。

- ③みつ目は、出来ることは自分ですということ。出来ないことがたくさんあって病院に連れてこられる子どもたちですが、保護者がさせていないことが多いからです。往復の電車の駅名を確認し、運賃を調べて券売機で切符を買う。病院の受付や計算を子どもに任せることもそうです。

そのために、私自身が心に誓っていることがあります。

※キムの誓い

- ①一つ目は、子どもたちと話すときには、業務や作業にならないよう、心をこめて話すということ。
- ②ふたつ目は、外来が業務連絡の場にならないよう、子どもが困っていることの相談や確認・指導ばかりでなく、楽しかったこと、嬉しかったことなど、日常の会話を大切にすること。年末年始ならサンタさんからのプレゼントのお話や、お年玉の使い道などのお話になるでしょうか。その中にそれぞれの家庭の子育て事情が見えます。業務連絡（指示、命令、確認、評価）につい

て話すとき、お母さんたちは必ず「キム先生、うちの家のぞきに来はりました？」と吹き出されます。朝の登校前なら「早よ起きなさい！さっさと着替えて、ご飯食べなさい！顔洗ったん？目やについてるやん！ご飯食べたんやったら、歯ア磨いて、さっさと学校行きなさい！体操服忘れてる！」。帰ってきたら「今日は怒られへんかった？連絡帳出して、さっさと宿題して！もっとキレイに字イ書きなさい！ゲームやめて、さっさとお風呂はいって、寝なさい！」って。業務連絡ですよな？

- ③みつつ目は、ともすれば自信を失いがちな子どもや保護者に、「好き」と「ありがとう」は惜しみなく言葉にして伝えるということ。「会うのを楽しみにしていたよ」「こないだの話の続きが気になって！」と迎え、「今日も会えてうれしかった」「知らなかったことを教えてもらって、キム先生また賢くなっちゃった！」「つぎ会えるのを楽しみにしているよ」と送り出します。手をつなぐ、背中や頭を撫でる、握手やハグは、受け入れられる子とは頻繁にかわします。

はじめましてのキム先生：

講演の冒頭、私がさまざまな年齢の、心や身体に悩みや障害をもつ人々の診療にあたっていることをお話しました。けれども相手の病気や障害あるいは年齢によって私の関わり方が違うのかというところではありません。

はじめましての外来は、ご家族に同席していただき、キムの自己紹介から始まります。キムという名前はキムチを連想しやすいので、子どもたちには「私の名前はキムっていうよ。お父さんからもらった大事な名前なのでキムチとかキムラとかと間違えないでね。後でもう一回聞くから、しっかり覚えていてね」と伝えます。「大事な名前・間違えないで」と言うときムチという子はほとんどいません。

名前もすぐに覚えてくれます。

年齢に合わせて表現は変わりますが、幼い子どもには「キム先生のお仕事は小児科のお医者さんです」「白衣を着ているときにはくももしもくポンポンくアーンくやくチックンくをする先生だけれど、今日は白衣を着ていないのでくももしもくポンポンくアーンくチックンくはしません！」と何も持たない両手を広げて見せ、「白衣を着ない時のキム先生は、お話ししたり遊んだりする先生です」と説明します。子どもの短い人生の中で、医者は「すぐに終わるよ」と言いながらしつこくノドの奥を棒で押さえてウエツとさせ、「痛くないよ」と言いつつ痛い注射をする、嫌なことをする嘘つきだと思われることが多いようです。どの子どもくすることくに加えてくしないことくを明言するとホッとした表情に変わります。

次に子どもの名前や年齢、家族のことや幼稚園・学校について尋ねる中で、子どもの理解力やコミュニケーション能力を推し量ります。年長の子どもにはなぜ病院に来たのか理由を尋ねますが、子ども自身に受診動機がなく、困っていることはないという答えが少なくありません。それでは親が心配していることがあると思うか問うと、中学生でも「あると思う」と答えてくれる事が多いので、そこからお話を始めます。

ここで子どもの理解が得られれば、保護者には退室していただきます。けれども幼児さんの場合は、保護者はとても緊張しながら私と子どもとのやりとりを観察しておられるので、静かにしていることを条件に、しばらく同席していただきます。子どもが楽しそうに笑顔で話し始めると保護者の緊張が解け、保護者がニコニコされる瞬間に子どもの緊張が解けるので、最初の日には、私が見つけた子どものいいところ、素敵なところをたくさん伝えるよう心がけています。

また保護者には必ず、受診の動機と、今一

番心配なことは何かを尋ねます。言葉の遅れや行動の問題という答えが返ってくるものと予想していると、私の思いは外れて、偏食がひどい・夜寝てくれないといった答えが返ってくることも多いのです。

まずは子どもとは子どもが困っていることから、保護者とは保護者が心配していることから、面談をスタートします。

悩める子どものつらい出来事・楽しい話

ここからはキム外来で出会った子どもたちのお話です。個人情報に配慮して、一部内容に手を加えていることをご了承ください。

1) たっちゃんのお話

たっちゃんと初めて出会ったのは4歳。言葉は少なく、奇声をあげて片時も止まらず走り回っていました。健診で言葉の遅れを指摘されたご両親は焦り、言葉の刺激が必要ではないかと考えて、さまざまな知育を実践している幼稚園に3年保育で入園させましたが、たっちゃんは多動・不注意があるため幼稚園じゅうを走り回り、先生のお話を聞きません。追いかけられ、つかまえられては叱られるので、クラスの友達や年長児まで先生と同じように彼に接します。お母さんが迎えに行くと、先生と、プチ先生と化した子どもたちが、彼のダメなところ、叱られたことを報告しにきます。最初は目新しいものがたくさんあって楽しかった幼稚園が叱られてばかりの場所になり、たっちゃんはひどく登園をいやがるようになり、お母さんも送迎することが苦痛になってしまいました。加えて、当初期待していた言葉の伸びもみられないため、相談機関から勧められて受診されたのです。

たっちゃんには多動・不注意・衝動性があり、目に見える刺激に気がそれて、聞く耳が持てない状況があります。大きな幼稚園の中で先生の言うことを聞き、集団生活に収まる

ことを期待するのは時期尚早のように思われました。刺激が少ない部屋で行った発達検査には凸凹はあるものの、知能の遅れもありません。母子の状況を考えると、外遊びをたくさんさせてくれる自由度の高い幼稚園のほうがよいと思われ、転園をすすめました。お母さんに出した条件はひとつ、見学にはたっちゃんを連れて行き、たっちゃんが「好き」と思える園を選ぶことでした。

全ての子どもが同じだとは言いません。発達障害のある子の中でも、知的好奇心が強く学習能力の高いお子さんは、やるべきことの順番や内容、日々の予定がはっきりしている環境で学び楽しめるので、教育的な幼稚園の方が合っています。けれども当時のたっちゃんには、そういった幼稚園は合わなかったんですね。

たっちゃんは、初めて遊びに行った日に、築山で泥んこになって遊ばせてくれた私立幼稚園がひと目で気に入りました。こじんまりした幼稚園ですが、たっちゃんが遊ぶ様子をニコニコ見守って下さる園長先生の穏やかな笑顔にご両親も安心され、すぐに転園しました。

転園から2ヶ月後のたっちゃんが走らずに歩いて「キム先生こんにちは」って診察室に入ってきたので私はびっくり。「ここにどうぞ」って着席をうながすと、それまで片時も椅子にお尻がくっついていなかったことがなかった彼が、丸椅子に座って私を見あげています。モゾモゾします。キョロキョロします。ゴソゴソもするけれど、お尻はずっと椅子の上。たっちゃんの手首にピンクの毛糸が巻いてあるのに気がつき「キム先生、ひとりあやとりできるで。ちょっと貸して」と毛糸を借りてあやとりを始めると、彼はキラキラの目で私の手元をみつめ、毛糸を返すと見よう見まねであやとりを始めるわけです。『幼稚園おもしろいでえ。先生、だいすきやでえ』と言いながら。

「びっくり、涙が出そう！」とお母さんに言うと、お母さんがニコニコしながら答えます。『キム先生、このごろ幼稚園に迎えに行ったら、たっちゃんが泣くんです。』『家に帰りたくない、もっと遊びたいって。』『日曜日は、どうして幼稚園お休みなのって泣くんです。』彼は言葉がどんどん増え、そのうちに私とお母さんと話している間、スタッフのそばで塗り絵をしながら待てるようになりました。そうして、年長組になり、覚えてたのひらがなで『キム先生、また遊ぼうね』と書いた年賀状をくれました。

子どもの特性と発達段階によっては、障害特性は変わらなくても、子どもを取り巻く環境が変わるだけで、親子が元気になることがあります。多動なたっちゃんは、思い切り外遊びができる環境の中で、細かいことで叱られず元気に遊べるようになりました。彼が脱線した時にも、その中にいいことがあれば、先生が具体的に皆の前で褒めてくださるとのこと。そのうちに、たっちゃんは一人で動き回るだけでなく、まわりの子どもと遊ぶことにも楽しみを見つけ、先生のすることに注目するとおもしろいことが起こることに気がついたようです。

2) けんちゃんのお話

けんちゃんには多動・不注意・衝動性などADHDのある人にみられる特性が激しく、6歳の誕生日に私が薬をプレゼントしたいと思うほどでした。彼が小学校に入学する前に投薬が有効かどうかを試し、スムーズに学校生活をスタートしてほしかったからで、全てのADHDのある子に投薬するわけではありません。けれども、投薬に抵抗感がある親御さんは多く、けんちゃんのご両親も入学後の様子を見たいということでした。1・2年生の担任には障害について説明し環境調整をしていただきました。1・2年生のあいだは学校生活がゆるやかに進むこともあり、色々と

問題は起きて、その都度適切に対応していただけました。

ところが3年生になると学校生活での課題が増え、自主・自律的に動くことが求められます。落ち着いているときには色々とできることがある彼は、わがままなだけで発達障害とは考えられないので、厳しく対応するという先生が担任されることになりました。同じクラスに発達障害が疑われるお子さんが複数おられたこともあり、やがてクラス内でトラブルが多発し、その中心にけんちゃんが君臨することになったのです。友だちへの暴力が多発したけんちゃんには、それなりの理由があるのですが、親子はクラスの親からも責められるようになり辛い状況にありました。

3年の二学期、彼が病院に来た時に、私にこう言うのです。「先生、前に言うてた薬ちょうだい」。「なんで」と聞くと「ボクは悪い子やから」って。「キム先生はなあ。お医者さんやけど、悪い子をいい子に変えるお薬は持ってないよ。あのお薬は、けんちゃんが悪い子だからではなく、多動、不注意、衝動性があるから、という話をしていたよね。自分で頑張ろうと思っていても、いろんなことが気になって動いてしまったり、思ったらすぐにやりたいと思うタイプだから、順番が守れなかったりして友だちとけんかになって、悪い子だって誤解されるかもしれない。自分がブレーキを引きたいときに、手助けをしてくれるお薬だから飲んでみてもいいかなってお話はしていたよね。キム先生が見ているあなたは、本当に優しく良い子だっていうことは知っているから。不注意や衝動性のために失敗して、みんなから悪い子だと思われているときに、ほんとは良い子だということを感じてもらうためには役に立つかもしれないね」というお話をしました。担任の先生とは連携が難しく、支援学級の先生と校長先生が応援団になり、彼だけでなく学級担任の支援をしてくださいました。ときには校長先生

が病院にも来ていただきました。彼には前述のコンサータを処方し、環境調整と相まって一定の効果がありました。これまでの経緯があるので、辛い状況であることに変わりありませんでした。

3学期の終わりごろ、私がけんちゃんに「新学年になるときの希望は？」と聞いたことがあります。そしたら彼が『一番目は担任の先生が変わること。二番目に校長先生が変わらないこと。三番目は僕がよくなるように頑張ること』って言ったんです。彼が「僕も頑張らんとあかん」と思っていたことに胸が熱くなりました。4年生になり、担任は転勤してきたばかりの女性の先生だったんですけれども、彼にとっていい先生のように思いました。新学期に彼に会ったときに「担任の先生変えてくれはった？」って聞くと「うん、変わった」。「で、どんな先生？」「あんな、学校が休みの日ももったいないぐらい良い先生になったよ」って言うんです。「そうかあ、よかった！」その先生は、彼が受診するたびにお手紙を彼に託していただきます。いいことがたくさん、それからトラブルについても少し。

彼は理解者の一人である近所の先生にピアノを習ってるんですが、お母さんいわくあまり上手ではない。だけど学校の音楽会の際にグランドピアノが弾きたくてオーディションに立候補したそうです。『キム先生、僕な、立候補したけどだめやってん。でもな、負けた相手はピアノの先生の娘やからしゃあないやんなあ』と言うので、「それは不利やなあ」って返しました。その後、担任の先生が彼の下承を得て音楽会のDVDをプレゼントしていただきました。病院ですぐに開いて見ますと、グランドピアノの横、最前列にエレクトーンが二台並んで、彼がエレクトーンを弾いていたんです。活躍できる場を与えられた彼の表情は緊張していて、とても素敵な音楽会でした。あんまりうれしくて、その地域での研修会に参加して下さった担任の先生

と私はお茶しましたね。ほんとにありがとうございました。先生は5年生も持ち上がって担任になっていただきました。5年3学期になったとき、6年生で先生が変わるので「どうする？先生、持ち上がりやったらいいのにねえ」。すると彼が言うんです。『キム先生、世の中そんなに甘くないから無理やと思うで』『そやけど、校長先生もいてはるし、頼んだら何とかうまいこといくかもしれへんやん』、『あんなあ、良いこと期待しすぎてがっかりするのいややから、だめやとボクは思っとくことにしてん』って言うんです。その後で私が「そやけど4・5年はあつという間に終わったなあ」って言うと『キム先生、楽しい時間は短いんや』と。負うた子に教えられるっていうことですね。彼がどれだけ楽しい4・5年生を送ったかっていうことがわかって頂けると思います。

3) こうたのこと

反抗挑戦性障害についてお話ししましょう。こうたとは彼が中学2年の頃に出会いました。彼はキーチェーンをガチャガチャ揺らしながら、ジーンズの下、イヤフォンで音楽を聴き、外来のベンチのこちら側に足を投げ出して座り、反対側の端っこにお母さんは文庫本を開いて静かに座っておられ、親子の間に会話も無く入って来られました。どうして中2で私のところに？と思いつつ、お母さんと二人になったときに事情を伺いますと『この子は勉強ができなくて、このごろは夜間徘徊、喫煙。学校で怒られてばかり。もう私はこの子が嫌い、学校帰りに交通事故で死んでくれたらと毎日祈っています』とおっしゃるのです。初診のときにこんなことを言われて、実は「なんちゅう親や！」とすごく驚いてしまったんです。彼と二人で話してみると、素直なお子さんで、勉強がとても苦手なことや、お母さんの小言が多くて家にいるのが辛いと話していました。中3になっても学力が

低いために、学校の先生からは「こんなやつの進路指導はできない」と言われて、お母さんは一層傷ついておられました。お母さんに彼を受け入れる気持ちの余裕がなく、子どもが素行に問題があるグループとつながっていたこともあり、私は地方にある不登校や発達障害の子も受け入れている全寮制の学校の情報を母子に伝えました。彼は福祉系のコースがある地元の学校の受験を希望し、学力的には無理だと言われていましたが、お母様には二校とも受験させていただくようお願いしました。「周囲がダメと言って止めるのと、不合格通知をもらうのとでは、納得の仕方が違うから」です。彼は二校とも受験し、全寮制の学校にのみ合格しました。合格通知が届いたときに連絡をくれたのですが、電話の向こうの彼は『この学校に行こうと思う』と言います。「遠いけど大丈夫？先生すすめたけどちょっと心配」って言うと、『もう僕は決心をしたから』と答え『でもなあ先生、くそばあの怒鳴り声も聞こえないと寂しいもんやと思う』って言うんですね。

彼は3年間、非常に規律正しく愛情をもって育ててくださる学校で学びました。休暇に帰ってくるたび、アマチュア無線や危険物取扱、小型船舶の操縦資格だとか、いろんな資格をとってきます。講座をうけて簡単な試験に通るともらえる資格もあると言いつつ、いつもポケットから『あれっ？』とか言って免許を出すわけですね。「あれって、ここ来るから見せようと思って持ってきたんやろう？すごいなあ……」と私は笑いながら、私の前に並べられた免許をみせてもらいます。「キム先生なんか、運転免許と医師免許しか持ってへん、こんなカッコイイ資格は持ってへんし」って言うと彼はちょっとうれしそうな顔をするわけです。

卒業するまでに、彼は9つぐらい資格をとって帰ってきました。そのときに彼は「学校はもう十分。僕はまだやりたいことが見つ

からないから2年間だけフリーターをしたい」と言い、お母さんは怒り狂っていました。働こうと彼は思っていたので、「履歴書にはちゃんとあなたの資格を全部書きなさいね」と助言し、私は彼を支持しました。彼は遊園地やガソリンスタンドでのアルバイトをしながら自動二輪の免許を取り、自分のお金で中古のバイクに乗るようになりました。あれだけ苦手だった勉強を自分からして免許をとったのです。一人でツーリングに出かけては素敵な写真を撮り、私に見せてくれます……このときには『あれ?!』とは言いません……たくさん見せてくれました。その後、彼は大好きなバイクの整備を仕事にしたいと考え、自動車整備学校を受験するため、2年間貯めたバイトのお金で家庭教師を雇って勉強しました。結果は不合格でしたが、彼は『先生、バイクの整備は趣味にするよ』と言い、今はある会社の運送部署でドライバーとして働いています。

私の外来を卒業する日の待合室で、彼とお母さんはくっついてファッション雑誌を見ていました。あら、まあ！、私はニヤリ。チェーンジャラジャラだった彼は、おしゃれなイケメンに変身しています。私が「えらくカッコいいね」って言うと、『オカンが勝手に服買うてきて、俺に金くれって請求して金とっていくねん』と笑います。「おめでとう、キム外来卒業やけれども」と声をかけると、彼が言うんです。『オカンこのごろ、僕が出勤するときに、気いつけやとか、行ってらっしゃいとか言ってくれるんよ。その言葉が一日のお守りみたいになるからさあ、僕、オカンが気いつけへんで何も言うてくれへんとき、玄関で何回も行ってきますって言うんよ』。もう私、うれしくなって「いい？それを人は<愛>と呼ぶんやで」。彼は『エヘヘ』と照れくさそうに笑って出て行きました。その後でお母さんと話をしました。「良い子に育ちましたね」と言いつつ、彼がお守りが

わりにお母さんの言葉を聞いていると言った話をしたらお母さん『いやあ、事故起こすんやったら自損事故やでえ。自分だけ死にやあって言ってるんですけど』とおっしゃるんです。でもその言葉にはやっぱり愛があると感じました。

子どもたちは思春期・青年期に、親に反抗的で、親が途方にくれるようなことをやってしまうことがあります。けれども、学ぶこと、良い恩師と良い環境に出会うことで子どもはこんなふう生きていくことができるっていうことがわかります。

4) ふとしくんのこと

ふとしくんは幼稚園の頃から外来に通っていました。多動・不注意・衝動性があり、知的障害ではないものの正常との境界域の知能で、自閉の特徴のある子です。小学校入学後、かんしゃくを起こすと水をぶちまけ、図書室の書架を倒すなど大騒ぎ。教室を飛び出すので、先生が追いかけると、彼には鬼ごっこになってしまいます。

学校生活は支援をうけて随分落ち着いたため、地域の公立中学校に進学しましたが、落ち着きがないことに腹をたてた担任の体罰で前歯が2本折れるという不幸な事件が起きました。彼は高等支援学校に進み、今は就職して働いています。

お別れの日、彼は自分の給料で私にパステルグリーンのタータンチェックのハンカチを買ってプレゼントしてくれました。私は、うれしくて「ふとしくんが自分の給料で買ったんやもん、先生ありがたくもらうよ」「こんなハンカチ買うてきたら、キム先生泣いてしまう」と涙をふきました。そのあと、お母さんと最後のごあいさつをしたときに、お母さんから思いがけない発言があり、キムは大爆発してしまいました。いわく、『もう、ふとしが百貨店のハンカチ売り場で、探して探し、迷いに迷いまして。キム先生にピンク

のハンカチを選びまして』、『いや緑、私は緑のハンカチをもらいました！？』、『でもキム先生はいつもスタイリッシュな服装してはるから。こっちの方を私がすすめたんです。』「最後の日にやりよったあ！」って思いました。自分で決めようって考えて、幼稚園から10数年間の私との関わりを思いつつ、彼が探して探し、探し求めて選んだピンクのハンカチを、お母さんが一瞬で、ひとことで緑に変えしまうなんて……皆さん、やっていませんか？

子どもたちがこんなふう悩んでやっとなり出した思いを、私たちの判断基準で一瞬にして無いことにしてしまうことがないよう心がけたいものです。

5) しょうくんのこと

最後のお話しです。しょうくんは高機能自閉症、こだわりが強く礼儀正しい子でした。正しいがゆえに彼は規則に忠実で、絶対にルールから外れることをしません。けれども中学・高校にはルール違反する子たちがたくさん周りにいます。どうして学校へ来て勉強せずにおしゃべりばかりして自分の勉強を邪魔するのか、どうして学校に化粧してミニスカートで来るのか、それを先生はどうしてちゃんと指導することができないのか、色々納得できないことが多く、いつもは静かな彼ですが、ときどきガンって怒り出して、みんなから『うざい』と非難されてしまいます。

しょうくんは、感覚過敏があり、匂いや音や体に触れられる感覚が鋭く、強い刺激が苦手でした。私が自分の髪をかきあげようと手を動かすと、触れられるかと思って体を避けてしまうことがよくありました。

彼はコツコツ勉強し、自動車整備士になりました。学校での真面目な姿勢が好感を持たれ、先生の推薦で大手メーカーの内定をもらいましたが、悩んだ末に社長さんをよく知っている自宅近くの整備工場に就職を決めまし

た。『先生、ぼく就職、こっちの方に決めたよ』と言う彼に、私は「これまであなたが決めてきた道は、一度も間違ったことはなかったと思う。たくさん考えて決めた道は、きっと正しい道だと思います。おめでとう！」と祝福しました。そして、「みんな、お別れするときにはハグが握手をするんやけど、君は苦手やったね……」と言うか言わないかの瞬間、私はしょうくに抱きしめられていたんですね。もう驚いて、うろたえた私が「何すんのん」って言ってしまったら、しょうくんは、大きな丸太を抱えるみたいに、私とのあいだに隙間をつくってハグしながら「だってキム先生がそうして欲しそうに見えたから」って言ってくれたんです。「ああ、そうしてほしいと思ってることがわかったん？」って私はメソメソ泣きました。

いつも最後にこの話をするようになります。自閉の人たちは、空気が読めない、人の気持ちが読めないと言われます。けれども長い時間を共にしていると、読めないのではなく読み取りにくい人たちで、ちゃんと伝えれば、ちゃんと受け止めてくれるということがわかります。

おわりに：

おわりに

- ◆ 発達障害のある子どもは、さまざまな力を持っています。ゆっくり流れる時間の中でこそ、見える・感じられる心、聞こえる声があり、心をギュッと抱きしめることもできます。
- ◆ 発達障害はその人そのもの。出来ないことを憂い闘うのではなく、子どもの特性を理解し、子どもが出来る事を生かし、自らを受容し生きて行く力を身につけられるよう、焦らないで支援したいものです。
- ◆ 家庭から園や学校、地域社会へと、子どもを守り育てるネットワークが広がって行きますように願っています。

子どもが持てる力を発揮して生きていくために、家庭や学校だけでなく、地域社会の人々が広く協力できたらと思います。理解と受容、必要な時の支援は必要ではありますが、支援とは特別待遇をすることか、できないことをやらせないですませることではないということを、今日のお話を聞いてくみとっていただけたでしょうか？

温かい気持ちが皆さんにちょっとでもバトンタッチできたのであればうれしいです。ご清聴ありがとうございました。